

トマスにおける「真」と範疇 Aquinas on Verum and Praedicamenta

上枝 美典
Yoshinori Ueeda

序

「有と置換される真」は、所謂 *transcendentia* の問題として、トマス以後、活発に議論されてきた。本論は、トマス・アクィナスにおける「有と置換される真」の考察を通して、中世における *transcendentia* 論の解釈に一つの視点を与えようとする試みである。以下、次の二つの疑問を手掛りに論を進める。

- 一、「或るものが有と置換される」ということが、トマスにおいて、何を意味するのか。我々はこの問題を、「附加」 *additio* 「制限」 *contractio* という言葉を手掛りに探求し、トマスにおける *transcendentia* の一側面を明らかにする。
- 二、「真が有と置換される」ということと「真が有に、神のイデアへの関係を附加する」ということが、如何にして両立するのか。この問いは、上の問いに対する答えと、トマスの関係論を前提する。今回は、この疑問に対する最終的な結論を示すことができないが、この考察を通して、*transcendentia* 論のより深い理解の必要性が明らかになるであろう。

第一章 有と範疇をめぐる二つの観点

トマスによれば、有以外の全ての概念は、有への附加 *additio* によって生じる。これを簡潔に説明しているのは、次に示す『真理論』冒頭の言葉である。

「何かが有に加えられると言われるのは、有という名称によっては表現されていない有自身のあり方を、その何かが表現している限りにおいてである。」¹⁾

この「有への附加」は、類に種差が加えられて種が構成される時の「類への附加」と、どの様に異なるのであろうか。

この二つの附加が異なるとされる根拠は、「有は類でない」という古代からの命題である。有が類でない以上、有に対する附加と、類に対する附加とは、当然、異なったものとなる。では何故、「有は類でない」のであろうか。我々はトマスに即して、次の三点を指摘しておこう。第一に、アリストテレスが言うように、有は有の外に種差を持たないこと。²⁾ 第二に、類が、その類のもとに含まれる諸々の種について、同語同義的に *univoce* 述語されるのに対して、有は様々な類について、アナログ的に *analogice* 述語されること。³⁾ この二点は、有が類でないとされる、いわば、論理的な根拠である。

しかしトマスは、これらとは別に、より根源的な視点から、有と類の違いを考えていると思われる。次のテキストを見てみよう。

「・・・十の範疇が有への附加に基づく仕方は、諸々の種が、種差の類への附加に基づく仕方と同じでなく、かえって、[それら範疇が] 有であるもの自体であるから、有が、これ、すなわち、「実体」或は「どれだけ」或は「どのような」になるために、何かが加えられるのを待つことはなく、直ちに、始めから、実体、或は、量、或は、性質であることは、明かである。」⁴⁾

このように、諸々の範疇に属するものは、有であるもの自体であり、また有は、「直ちに、始めから」 *statim a principio* いずれかの範疇に属するものとして在る。従って、現実存在する個々の事物は、およそ存在する限り、まさにそれ自身が有なのであり、そして、有であれば必ず、十

の範疇のどれかに属するものとして存在する。それ故トマスにおいて、「有は類でない」という命題は、単に「有は類よりも普遍的である」という意味ではなく、寧ろ「有は範疇を認識する観点とは別の観点から捉えられる」という意味に理解されていると思われる。

では、その「別の観点」とは何であろうか。次のテキストを見てみよう。

「・・・そもそも、有とは、本来の意味においては、何物かが現実的に存在することを言うが、現実態は本来、可能態への関係においてあるものであるから、何物かが端的な意味で有といわれるのは、そのものを純粹に可能態にあるものから区別する最初のものによるのである。しかるにかかる区別をもたらす最初のものとは、それぞれの事物にとってそれぞれの実体的存在に他ならない。故にそれぞれのものは、各自の実体的存在によって「端的な意味での有」と言われるのである。・・・」5)

ここで言われている通り、有は、「何物かが現実的に存在すること」を、本来的に意味する。しかるに、「現実的に存在する」ことは、実体、量などの範疇を認識する観点からは捉えられず、別のもう一つの観点を前提すると思われる。そしてその観点とは、まさに、「現実態」を捉える観点であると考えられる。それ故、次のように言うことが出来るであろう。

範疇を認識する観点から見れば、十の範疇が最高類であり、それらの範疇より更に共通的な概念はない。しかし、そのような観点を離れて、世界を現実性という観点から見れば、実体、附帯性の別なく、それらが現実性に在るという、あらゆる事物に共通な現実性を認めることができる。そして有は、この観点から捉えられる。従って、有と類とを捉えるこの観点の相違が、「有は類でない」ことの重要な根拠の一つであると思われる。6)

我々はトマスの中に、以上の二つの観点を確認する。ではこれをもとに、次に超範疇的概念の探究へと進むことにしよう。

第二章 「有と置換されるもの」について

(「概念のみにおける附加」の意味) トマスは、一、真、善など、「有と置換されるもの」の、有への附加を論じる時、必ずと言っていいほど、それが概念 ratio における附加であることを強調する 7)。では、「概念における附加」とは何を意味するのであろうか。本章では、次のテキストをもとに、この問題を考察する。

「実体、量、質、および、これらのもとに包含されるものは、有を或る特定の何性ないし本性にあてはめるという仕方、有を制限する。これに反し善は、そのような仕方何らかのものを有に附加するのではなくて、ただ「欲求されうるもの」ないし「完全性」の概念を有に附加するにすぎない。そしてこの概念は、いかなる本性における存在にも適合するのである。ゆえに善は有を制限しない。」8)

このテキストにおいて、善と対置されているのは、「実体、量、質、および、これらのもとに包含されるもの」である。このうち、「実体、量、質」の三つは、十の範疇すべてを代表して挙げられており、また「それらのもとに包含されるもの」は、十の範疇のもとに含まれる、あらゆる類と種を指していると思われる。つまりここでは、超範疇的概念としての善が、範疇や、類、種のような範疇的概念と、明確に対比させられているのである。

この対比に平行して、「有を制限するという仕方、何かを有に附加する」と、「概念だけを附加する」とが、non - sed という仕方に対比させられている。これらの事から、「概念における附加は、有を制限しない」と言うことが出来る。更にまた、この「有を制限する」を、トマスは、「有を或る特定の何性ないし本性にあてはめるという仕方、有を制限する」と説明している。従って、「概念だけを附加する」とは、「有を或る特定の何性ないし本性にあてはめない」ということでなければならない。では、「有を或る特定の何性ないし本性にあてはめない」とは如何なる意味なのであろうか。

我々は、このことを、前章での考察に基づいて、次のように考える。現実の世界を、「何であるか」或は「定義」を捉える目でみれば、全てのものは、それぞれに特定の何性ないし本性を持っており、それらの事物を離れて、独立に、特定の本性を持たない有が在るのではない。従って、「有を或る特定の何性ないし本性にあてはめる」と言っても、それは、類を特定の種に限定する場合のように、質料的概念としての有が持つ可能的意味内容の一つを限定し、現実化するという仕方によって為されるのではない。もしそうであれば、全ての概念の中に、有は同語同義的に含

まれることになる。しかし、トマスは、「諸範疇に、同語同義的に述語されるものは何もない」9)と言う。確かに、全ての概念は、有を基礎とし、有への附加によって理解される。しかし、有は、同語同義的に全ての概念に属するのではない。有は、いわば、概念界における第一質料のようなものではない。

それ故、「有を或る特定の何性ないし本性に当てはめる」とは、先に確認した二つの観点のうち、現実性に着目する観点によって捉えた有を、もう一つの観点である、範疇を捉える観点によって、実体、量、質などとして捉え直すことであると考えられる。そして、この様にして捉えられた概念は、「有を制限する」*contrahere ens*と言われるのである。

他方、これに対比させられていた「概念だけを附加する」とは、始めに捉えた有を範疇的観点から捉え直すことなく、それとは別の観点、即ち、存在の現実態に着目する観点から、より深く、はっきりと理解していくことであると思われる。そして、「有と置換される」と言われるのは、この様にして捉えられたものなのである。

我々はここで、始めに提出した第一の問題に対する解答を得た。では次に、これをもとに、第二の問題の探求へ進むことにしよう。

第三章 「有と置換される真」を巡る問題

トマスによれば、「有と置換される真」は、有に、神または人間知性への関係を加える。10) この基本的な考え方は、トマスの諸著作を一貫しているが、しかし、一步踏み込んで、真は有に、如何なる知性に対する、如何なる関係を加えるのであるかと考えるならば、我々は、すぐに、次のような問題に直面する。

トマスは、真が有に一種の「関係」を附加すると言う。然るに、「関係」は、アリストテレスによって、十の範疇の一つに数えられている。それ故、もしトマスが言うように、真が有に「関係」を加えるのであれば、真は、範疇的な観点から捉えられる、何らかの附帯性を表現することになるのではないだろうか。もしそうであれば、真は「関係」という類の内にある、「知性への関係」という種ではあっても、決して「有と置換されるもの」ではないであろう。しかし、トマスの主張によれば、真は有と置換される。従ってトマスにおいて、真が、何らかの基体に内属する附帯性を表現するという帰結は、認められないはずである。それでは、「真が有に関係を加える」ということと、「真が有と置換される」ということとは、如何にして両立するのだろうか。これが、これまでの我々の考察の中から浮かび上がってくる、疑問である。

この様な疑問に対して、『真理論』第二十一問第一項主文は、真が有に加える関係を実在的關係ではなく、単に概念的な関係だとすることによって、答えようとする(11)。トマスは言う。真が有に附加する関係とは、「知性を完成させ得る」という有のあり方である。しかるに、実在的關係は一種の「依存」*dependentia*であるから、「完成させ得るもの」*perfectivum*は、「完成させられ得るもの」*perfectibile*に依存せず、従って実在的關係を持たない。それ故、「知性を完成させ得るもの」としての真は、「完成させられ得るもの」としての知性に対して実在的關係を持たず、単に概念的な関係を持つに過ぎない。従って、そのように理解された「真」の概念は、有という基体に内属する附帯性ではなく、かえって、実在的な有を認識する知性の理解内容に伴ってくる、単に概念的なものを表現する。しかるに、実在的でない関係は、有を制限しない(12)。従って、単に概念的な関係を有に附加する真は、有を制限せず、有と置換される。この様にトマスは述べ、先の疑問に対して、解答を与えているように見える。

しかし、有が「知性を完成させ得る」というあり方を持つと言われる時、その「知性」は、人間の知性を指しているものであり、決して、神の知性を含んだ意味で言われているのではない。なぜなら、神の知性は、如何なる意味においても「完成させられ得るもの」ではないから。従って、『真理論』のこの箇所では、専ら、人間知性との関係における真が論じられていると考えられる。しかし、トマスが「真」を論じる際に、このように神の知性を全く排除するのは、例外的であると思われる。寧ろ、人間知性との関連で言われる「真」も、神の知性との関連で言われる「真」も、共に有と置換されるというのが、トマスの立場であろう。(13)

例えば、『命題集注解』第一卷第八区分第一問第三項主文でも、真が有に加える関係として、「範型的形相への関係」と、「認識能力への関係」の二つが挙げられている。そこで言われる「範型的形相」*forma exemplaris*とは、同じ箇所「神の範型」*exemplar divinum*と言い替えられていることからわかるように、神の知性の内に在る被造物の範型、即ち、イデアである(14)。

しかし、このように、全てのものが、神の知性との関係において真と言われることを認めるならば、まさに、先に指摘した問題、即ち、実在的関係を有に附加することによって、有が関係の類に制限されるのではないかという問題が生じるのである。なぜなら、トマスが多く箇所で述べているように、神の被造物への関係が概念的であるのに対し、被造物の神への関係は実在的であるから 15)、トマスの関係論において、「被造物の神のアイデアへの関係」は実在的関係と言わざるを得ないからである。

それでは、「真は有に、神のアイデアへの実在的な関係を附加する」ということと、「真は有の附帯性ではなく、かえって、有と置換される」ということとは、如何なる意味においても両立しないのであろうか。もしそうであれば、これは、トマス真理論における問題点として指摘されるべきであろう。しかし、もしこの両者が、トマスの中で、矛盾なく両立しているのであれば、我々は、この一見矛盾と見える事柄の内に、トマス自身の隠された前提を探究しなければならない。我々は、後者の態度を取って、次のように考えてみよう。

先ず、「〈真は有にアイデアへの実在的関係を附加する〉」ということと、〈真は有と置換される〉ということとが矛盾なく両立する」と仮定する。この仮定は、「アイデアへの実在的関係は有を制限しない」と言い換えられる。このことから、「実在的関係のうちの或るものは有を制限しない」と言うことが出来るが、これを我々のこれまでの探究に基づいて言い替えるならば、「実在的関係のうちの或るものは範疇的思惟の外で捉えられる」となる。従って、「真は有にアイデアへの実在的関係を附加する」とことと「真は有と置換される」とことが矛盾なく両立するためには、「範疇的思惟の外で捉えられる実在的関係」、即ち、超範疇的関係 *relatio transcendentalis* とでも呼ぶべきものが考えられていなければならないことが解る。この超範疇的関係は、範疇的思惟の外で捉えられるのであるから、範疇としての実在的関係とは異なり、有を存在の現実態に着目する観点から考察し、その観点から認められた有のあり方の一つを、はっきりと表現する。従って、神の知性との関係において言われる真は、このように理解される限りにおいて、「有と置換されるもの」であり得る。

それでは、「アイデアへの実在的関係」が、この様な超範疇的な実在的関係であると主張するに十分な根拠が、トマスの中にあるだろうか。さしあたり、我々は、次のように考えてみる事が出来るであろう。

被造物の、神のアイデアへの実在的関係は、被造物相互のうちに見いだされる実在的関係とは区別されると思われる。というのも、被造物相互のうちで成立している実在的関係は、神が、その知性と意志によって、被造の世界において創造した実在である。従って、被造物相互の関係は、被造的世界の内に見いだされる原理に従って、実体に内属する附帯性として、その実在性が認められる。しかし、被造物の神に対する実在的関係は、この様な被造的世界の原理によっては捉えきれないものである。なぜなら、被造物の神に対する実在的関係は、被造物を基体としてそれに内属する附帯性というよりは、現実世界の根底に見て取られた「受動性」（言い替えれば、「在らしめられて在る」ということ）を表現していると思われるからである。従って、存在するものが真と言われる場合も、その真は、既に存在する基体としての有に内属する、附帯性としての「関係」を表現するというよりはむしろ、被造物が、そもそも存在するものとして考えられる限り、そこに必然的に伴って来る了解、即ち、そのものが、神によって、神のアイデアに一致するものとして認められているという、神の人格的働きに基づく実在的な一種の受動性の了解を含意していると言えるのではないだろうか。そしてトマスにおける真は、この様な立場で考えられてはじめて、実在的なものでありながら、なおかつ、「有と置換されるもの」であり得るのではないだろうか。 16)

【註】

1)De Verit.q.1,a.1,c.

2)ST1,q.3,a.5,c. etc.

3)In 3 Physic. l.5,n.322

In 10 Met.l.3,n.1966 etc.

4)In 8 Met.l.5,n.1763

5)ST1,q.5,a.1,ad1:山田訳

6)この他にも、類の共通性は、人間知性において在る限りでの本質が、魂の外なる諸事物に対して等しく類似しているという、人間の知性認識のあり方に伴うものであるが、有の共通性は、あらゆるものの認識において、最初に知性に入ってくるという仕方で、認識の基礎となる点でも異なる。しかしこの点は、範疇的認識と超範疇的認識との秩序に関する別の問題に属する。

7)In 1 Sent.d.8,q.1,a.3,c.

De Verit.q.21,a.1,c.

De Pot.q.9,a.7,ad6 etc.

8)ST1,q.5,a.3,ad1:山田訳

9)In 1Ethic.l.6,n.81

10)ST1,q.16,a.3,c.

De Verit.q.1,a.1,c.;q.21,a.1,c.

in 1Sent.d.19,q.5,a.1,ad3, ad7 etc.

11)以下の論述は、De Verit.q.21,a.1,c.に即する。

12)De Verit.q.21,a.1,ad3

13)De Verit.q.1,a.2,ad1;なおこの問題については、Raymond J.McCall St.Thomas on Ontological Truth <The New Scholasticism>, vol.12, pp.9-29, 1937 参照

また、今回問題とした「有と置換される真」と、神について言われる「真」「真理」との関連（稲垣先生からの質問）は、トマスにおけるアナログアと transcendentia の関連を明らかにするという問題意識のもとに考えなければならない。また、そのような研究は、トマス以外（特にスコトゥス）の transcendentia 論との比較において為されるべきであろう。

14)イデアを典型的形相と呼ぶ例としては、ST1,q.44,a.3,c.

15)De Pot,q.7,a.9,c.;ST1,q.28,a.1,ad3

16)もちろんこの結論は、一つの解釈の方向を示すものに過ぎない。